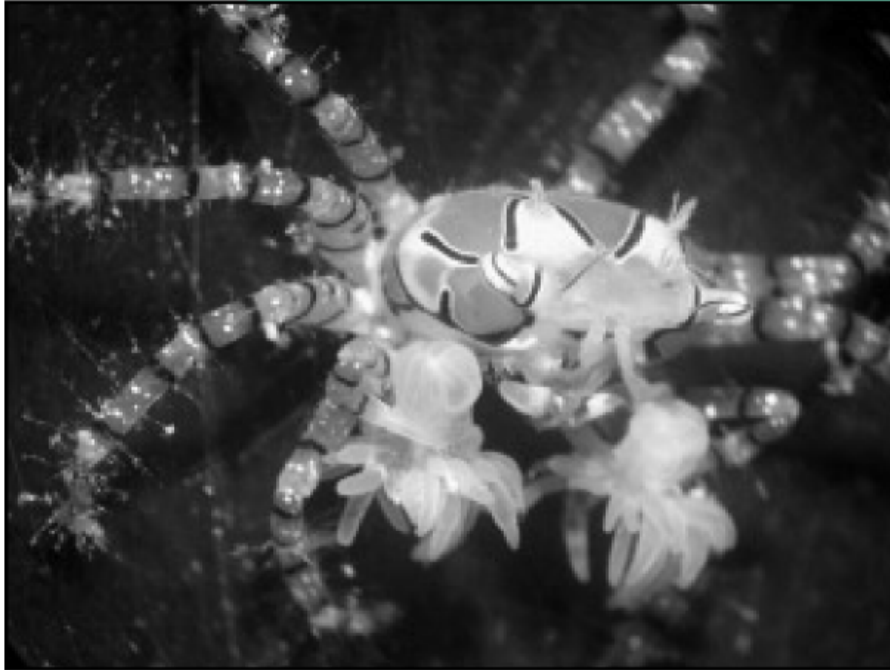


## キンチャクガニ *Lybia tessellata* (Latreille, 1812)



キンチャクガニは、岩の上や瓦礫の隙間にいるものと思っていた。思いついては探していたが、7年間で3個体しか見つけることが出来なかった。2004年夏のサンゴの産卵調査に出かけたある夜、ふと見るとライトの明かりに照らされた樹枝状アナサンゴモドキの枝の隙間にその姿があった。ためしに探してみると、他のアナサンゴモドキ群体からも見つかり、結局一晩で7個体、7年間探した成果の倍以上の数をみつけることが出来た。アナサンゴモドキの刺胞に守られているのだろうか。すでにこのガニは、別の刺胞動物で身を守るようしている。ほとんど全てのガニは黄方のはさみ脚にカニハサミイソギンチャク *Bunodeopsis prehensa* を1つずつはさんでいるのである。ちょっかいを出すときのイソギンチャクを振り回し、威嚇し始める。一体どこでイソギンチャクを見つけ出ずのかは謎である。

採集・撮影：岩尾研二  
採集日：2004年6月5日  
採集場所：阿嘉島マジノハマ

### 編集後記

編集 岩尾研二（研究員）

第10回国際サンゴ礁シンポジウム（沖縄）も、それに引き続いて行った阿嘉島での科学巡検も無事終了しました。この勢いをさんご礁保全活動へと繋げていきたいものです。今も慶良間の海の一番の悩みは、オニヒトデです。なかなかいなくなりません。潜るたびに白い骨格をさらしたサンゴを見るのは、切ないものです。それでも、慶良間のさんご礁は、まだ他の場所に比べると美しいのでしょうか、多くの人が島にやってきます。阿嘉島臨海研究所にも修学旅行の学校や見学希望者がたくさん訪れ、さんご礁教室の依頼もたびたびあり、人々のサンゴやさんご礁に対する関心は、確実に高まっていると感じます。けれども、実際の保全活動は、いまだに地元の人たちの善意に頼る部分が多く、政策をベースにした具体的な活動は、あまり見られません。今号も本誌には、研究者による貴重な報告を載せることが出来ました。さんご礁の海水に含まれる化学物質からいろいろな生物の話題までがあり、生物同士もつながりあっているし、物質と生物も関わりあっていることが良くわかります。人間は、そこにどのように結びついていくべきなのでしょう。研究者の端くれとしては、その結びつき方を考え実行するために、研究成果を政策担当者や他の多くの人にもっとうまく伝えられるように努力しなければならぬと感じています。



発行人  
ESTABLISHMENT OF TROPICAL MARINE ECOLOGICAL RESEARCH

**財団法人熱帯海洋生態研究振興財団**

〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ614号 TEL. & FAX. 03 -3490-7266

AKAJIMA MARINE SCIENCE LABORATORY

**阿嘉島臨海研究所**

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179 TEL. 098-987-2304 FAX. 098-987-2875  
E-mail: amsl@ryukyu.ne.jp Homepage URL: <http://www.amsl.or.jp>